
【タイトル】 Dear Alice 【未定】

魔女persimmon

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【タイトル】Dear Alice【未定】

【Nコード】

N7882X

【作者名】

魔女persimmon

【あらすじ】

和都・サイハテの学園【檻桜】に通う一色 零は平凡な毎日を送っていた。そんなある日、零は悲痛に『アリス』と叫ぶ謎の声、そして自分が殺されるという夢を見る。――アリスとは誰だ？そして零は、自分とよく似た少女に出会う。『あたし、アリス！』少女は無邪気に笑う。『ごきげんよう。そして、さようなら』少女は無邪気に笑いながら、刃を零に振り下ろす。為す術無く斬り倒された零の耳に、あの謎の声が響く。『なアお前、死にたいのか？』それは嘲笑いながら零に囁く。『死にたくないなら、俺を助ける』謎の

声に零が答えた時、それは姿を現した。千年前【十二月の悲劇】を
起こした大罪人【チエシヤ猫】だった。『さア、悲劇の幕開けだ！』
切り裂きアリスとの死闘が今、始まった。

・ p r o l o g u e ・

『 × × × × × × 』

声が、聞こえる。

『 × × × × × × 』

誰の声なのか、解らない。
何を言っているのか、聞き取れない。

『 × × × × × × 』

けれどそれは、とても悲痛な声で、苦しみ、叫び、何かを訴えている。

『 × × × × × × 』

……………泣いているの？

『 ……………アリス 』

… ……アリス？

『 どうして……………アリス……………？ 』

誰？ アリス？

『どうして……』

『どうして……俺を、裏切った？』

ざくり

不意に伸びてきた、鋭く尖った長い爪が、自分の首を貫き、世界を赤く染め上げた。

ぱつと目を開くと、そこはいつもと変わらない、白を基調とした自分の部屋が広がっていた。

ふー、と息を一つ吐き、徐おもむろに、自分の首に触れてみる。

穴は開いていない。何も突き刺さってはいない。血も出てはいない。

良かった。生きている。

「夢、か」

はぁーと、息を吐く。額に汗が浮かんでいた。前髪が張り付いて嫌な感じ。

嫌な夢だった。十四年間生きて見た中で、一番、嫌な、最低最悪な夢。

暗闇の中を、誰かが悲しげに叫んでいた。

何を言っているのか、聞き取れることは出来なかったけれど、その余りにも悲痛な叫びに、此方が悲しくなってくるほどだった。

そして、暗闇から不意に伸びてきた鋭利な鉤爪。それが自分の無防備な首を、まるで布に針を通すかの如く、柔らかく、だけど強靱に貫き、自分の首から、赤く、どろりとした血液が、迸はなった。

「やけにリアルな夢だったな…」

首を片手で押さえながらベッドから起き上がり、家を出る準備を始める。

何とも無いのだけれど、何だか気になってしまふ。むず痒い。

首を押さえていないと、血が噴き出してくるんじゃないか、とい

う錯覚に陥ってしまう気がする。

「今日はマフラーでも巻いて学校に行くかな」

衣装箆笥から、水色のアーガイルのマフラーを引っ張り出す。春先に閉まったばかりのを、もう出すことになってしまつとは……季節的に早い気もする（現に今はまだ十月に入ったばかり）だが、まあそこらへんは良しとしてしまおう。自己完結自己完結。

昨晚作り置きしていたおにぎりを口にしながら、鞆に教科書やらを色々詰め込み、ふと、思い出す。

『アリスって、誰だ？』

夢の中の声で、唯一聞き取れた単語。

その声は確かに、はつきり『アリス』と言っていた。

『他は何言っているか全然解らなかったのに、何でアリスだけ聞き取れたんだろう？』

まあ、その後ぐっさりと爪が首に食い込むわけだが。

「アリス、アリス、アリス……」

確か昔、英帝国の物語本を読んだ時、『アリス』で名前の本を読んだような記憶が、有ったような、無かったような……うーむ……。

「あ、時間」

思い出したかのように時計を見ると、針は七時半過ぎを差していた。

いつも家を出る時間を、少し過ぎてしまっている。

「やばいやばい」

慌ててマフラーを首に巻き、鞆を肩に担ぐと、一色ひといろ 零ぜろは家を走り出た。

『×××××』

戸が閉まる音の合間に、夢の中で聞いた声が、微かに聞こえたよ
うな気がした。

和都・カイライ【クグツ通り】

色とりどりの服を並べたファッションショップや、蘭国の菓子を扱
う喫茶店など、風に乗って甘い匂い漂う華やかな商店が建ち並んで
いる。

そのクグツ通りから二本ほど裏道に入り、左に曲がると、先ほど通
って来た通りとは全く違う、日の光が刺さない淫靡な風俗街へと
変わる。

表では酒場や宿泊施設などを営んでいるように見せ、中に入れば、
怪しげな錠剤を売る国籍不明の者達や、下卑た笑みを浮かべた娼婦
が群がってくる。

此処は、【裏クゲツ通り】

独特の雰囲気と過去を持ち合わせる者達が集い作り上げた、和都最低の無法地帯。

欲望と虚無感が混在し、不愉快な二重奏^{デュエット}を奏で、通りを支配している。

そんな澀んだ空気が立ち込める危険地帯を零はただ一人、歩いていった。

「おい坊ちゃん。こんら時間にどおしれ、此処をうるついでんらあ…？」

呂律の回らない口調で、壁に身体をもたれた男が野卑な言葉で話しかけて来る。

『坊ちゃんか…』男の言葉を頭で反芻して、ちらつと横目で男を見る。

まだ朝だというのに、酒瓶を手に、顔を赤らめ、泥酔している。

零は男を一瞥すると、男の言動を無視して足を進めた。

「調子に乗るな糞餓鬼い」と男の怒鳴る声が聞こえたが、怒鳴っただけで追い掛けては来なかった。

いくつかの通りを抜け、裏商店街に出ると、零は、色んな視線を向けられた。

先ほどの男のように、泥酔して足元が覚束無い髭面の男、肌を大胆に露出した衣装を纏ったストリートガール、両腕の刺青を見せ付けるようにノースリーブスを着た屈強な青年達、ピアスを身体の随所にあしらった目付きの悪い若者、うつろな瞳をしてこちらを見つめる年端の行かない少女。

猥雑な視線が飛び交う中、零は平然な態度で、悠々と裏商店街を歩いた。

「見ろよ相棒」

「おやおや兄弟」

「こんな所をたった一人で」

「危ない危ない」

「襲われてもいいのかね？」

「綺麗な顔をしているからね」

背後から、同じトーンでクスクスと、楽しそうに笑う声が聞こえた。

ふうーと、大きく息をつく。あまりのやり取りに酷く厭あきれてしまつ。

「……………おはようございます。トウィードル先輩方」

零が厭あきれながら振り返れば、暗闇で空色の瞳を綺麗に光らせた、同じ顔、同じ背丈、同じ格好の二人の青年が、にやにやと笑いながら路地裏から出て来た。

「おはようゼロ！」

双子は同じ笑顔で、にっこりと、無邪気に笑った。

「今日も危険地帯までお迎えご苦労！」

「危険地帯だと思つのなら、此処まで迎え来させるの止めさせて欲しいんですけど」

「だーめ！」

不機嫌な零を左右で挟み、双子は愉快にケラケラと笑った。

兄・トウィードル・ディー。弟・トウィードル・ダム。

二人合わせて【トウィードル兄弟】と称される、空色の瞳と、長い手足、そして高い身長が特徴的な、まるで、鏡を見ているかのよ

うな錯覚に陥らせてしまうほどの、完璧な一卵性双生児。

悪戯と他人を玩具のように弄ぶのが、大好きな小悪魔系どころか死神系のトラブルメイカーであり、零の二学年上の先輩。

見分けの付かない外見（前髪のみディーは右分けの伊達眼鏡、ダムは左分けのピン止め）をしているが、気まぐれに入れ替わったりするので、周りの人々は区別が付かない。だけれども、何故か零だけ双子の区別が付く。双子最大の謎。

「さつきなんて酔っ払いに『坊ちゃん』なんて呼び止められたんですよ」

「またー？」

「ゼロはよく絡まれるよなー」

ディーが零の頭をぐりぐりと撫で繰り回し、整っていた零の焦茶色の髪の毛が、ぼさぼさに乱れた。

「でもさー、この前みたいに変態に犯られかけるよりは良くね？」

「その前は売女ばいたに絡まれてたよなー」

「その前の前は厳つい兄ちゃん共に囲まれてたよなー」

ダムが乱れたゼロの髪の毛を、手櫛で優しく整えた。

「自分は好きで絡まれているわけじゃ無いんだけど……」

この前、双子と別れてから一人歩いていたら、暗がりですぐに男が手招きしていた。何か用かと思いついて行ったら、急に態度が豹変された……その前は体調が悪いと、道端で蹲っていた女性を介抱していたら、お礼がしたいとしつこく付き纏われて……その前の前は、そつちを見てもいないのに、変な言掛りを付けられ、多数の男に囲まれた。

まあ、その後何処からとも無く現れた双子に、助けてもらったわ

けだが。

「はいはいはい」

「ゼロは少し危機感が無さ過ぎだと俺は思いまーす！」

「僕もそう思いまーす！」

「危機感0なゼロはいつか痛い目にあっちゃつかも…」

「名前が零なだけに？」

「有り得るー！」

きやははは、と高笑いする双子。

悪気の無い笑いに、イラッと来る。

「先輩、怒りますよ？」

「「ごめーんね！」」

笑いながら謝る双子に、ゼロは厭きれ返りつつも、ふ、と微笑んだ。

「まあ、そんな危ない状況に陥っても、いつも先輩たちが助けに来てくださいますよね」

「ゼロは見ていて危なっかしいからなー」

「放つとけないっていうか、目を離せないっていうか…」

「なんか今更ですけど、ありがとございます」

「だって俺達ゼロのストーカーだからー！」

「ゼロのこといつも見てるよー！」

「「ゼロのこと大好きだもんねー！」」

「前言撤回。気持ち悪っ」

「「褒め言葉」」

ペロツと舌を出し、顔を引き攣らせた零に双子は揃いのウィンク

を向けた。

「またそうやって人のことをからかって…」

「ごめんごめん」

「悪気は無いんだ」

自分で言うな、と心の中で毒吐いた。

「それで、ゼロ？」

「？」

二人がぐるりと回って、振り返る。

「今日は珍しく五分ほど遅かったね」

「時間にも自分にも厳しいゼロがありえない！」

「まさか道に迷ったとか？」

「無い無い絶対ありえない！」

「まさかこんな朝早くから可哀かわいい女の子と暗がりでにゃんにゃん！

？」

「きゃーゼロツたら朝から淫乱ー！」

「そんなこと、するわけが無いでしょう？」

全く以って、ありえない。

「「じゃあ何があったのさ？」」

ぶーと、頬を膨らませ、首をロボットのようにかくと、同じように傾げる双子。

眉を曇らす表情まで、合わせ鏡のように揃っている。

「そんな心配するようなことじゃありませんよ。ただ、朝から変な夢を見て…」

「「夢？」」

「はい。それも奇妙で後味の悪い夢。その夢のことを思っていたら、気付いたら時間だったんですよ」

「ねえ」

「その夢ってさ」

「「どんな夢だったの？」」

双子に、朝見た夢を簡潔に述べる。

暗闇の中から、悲しげに響く叫び声、『アリス』という名前、そして、何処からか伸びてきた爪に突きぬかれ、息絶えたこと。少しばかり話を盛ってしまった様な気もする。

「まあ所詮夢は夢です。自分はこれこの通り。ぴんぴんしています」
腕を曲げ、無い力瘤ちからこぶを双子に見せ付ける。

そんな双子はというと、一層眉を曇らせていた。

「先輩？」

「なんか結構怖かったんだけど…」

「俺、ゼロのことだから、どうせ落とし穴に落ちて首の骨折るとか、知らない女の人に鎌で追い掛けられるとかだと期待していた俺が馬鹿だった…」

「ダム先輩の夢の方が怖い」

落とし穴に落ちて首の骨を折るとか…どんだけ深いんだよ。

「つーか【アリス】か…」

「デイー先輩聞いたこと有るんですか？」

「何か最近何処かで聞いたような、聞かなかったような…」

「あれじゃね？ 裏クグツに新しく出来たBERの名前！」
「それだー！」

ハイタッチして、爆笑する双子。期待した自分が馬鹿だった。

「まあ、夢で良かったんじゃない？」

「現実だったらすんげえ怖いけどな」

「でも、目が醒めてからも、何か、現実みたいな感覚がずっとして
いて…今日なんか思わずマフラー巻いて来てしまいました」

「ちょ、いくら何でもゼロ過敏過ぎ！」

「十月初旬にマフラーは早過ぎだって！」

「ですよー…家出てから後悔しましたよ」

ぎやははと笑う双子の間に挟まれながら、零も不器用に、一緒に
笑った。

今日もいつもと同じ平凡な日々が始まるはずだった。

あんな夢を見なければ…今更思い返しても、もう遅かった。

悲劇は、既に傍に迫って来ていた。

和都・サイハテの最奥に聳え立つ学園【檻桜学園】

国花である【桜】が学園を檻のように囲み、一年中咲き誇っている。

幼等部から大学部まで存在している一に成績、二に家柄、そして金重視の和都一の名門進学校。

桜をあしらった学園の門を潜れば、薄紅色の可憐な花片が、ひらりと空を舞っている。

「あ、ゼロ」

「桜の花片が頭に付いてる」

「取ったげるー!」

「……………とか言いつつ、花片付ける気ですね?」

「まっさかー!」

「そんなことするわけ無い無ーい!」

「じゃあその手の中に大量に収まっている桜の花片は何ですか?」

「チツ」

「そう同じ手に何度も引っ掛かりませんよ」

零がそう言うと、双子は口を尖らせながら、手の中に収められた大量の花片を投げ捨てた。

「ゼロ少しは引っ掛かれよー」

「何で解っていることに対して、わざわざ引っ掛からなければいけないんですか?」

「ゼロつまんなー」

「少しは反省してくださいよ」

「ふーんだ！ ゼロのKYめ！」

口を尖らせたまま、双子はスタスタと足早に進んで行ってしまった。

……やばい。双子の機嫌を損ねた。

「先輩！ トウイールドル先輩！ 自分が大人気無かったです！ だからちよつと…スピード落としてください！」

長い足で、しかも大股で進む双子に、なかなか追いつけない。

双子は歩いているはずなのに、こっちは走って双子を追い掛けるしなう。

あ、何だか脇腹が痛くなってきた。

「せ、先輩方…ごぶっ！」

急に立ち止まった双子に零は止まり切れなく、顔面を思い切り双子の背に打ち当たってしまった。

我ながら酷く醜い声を上げてしまった。

「せ、先輩？」

「……喰らえ！ 不意打ち桜吹雪いいいいいい！！」

「なっ！？ うわあああ！！？」

勢いよく振り向いてきたと思いきや、双子は両手に大量に抱えた桜の花片を、勢いよく零に向けて打ちまけた。

それを手で払おうと、零は両手を、舞い散る花片へ掲げた。

ふわりと薄紅の花片が、手の平にどろりと零れ落ちた。

「え……………?」

赤黒い、どろりとした粘液が、手の平を赤く染め上げた。

そして、手の平に収まりきれなかった赤が、手首を滑らかに伝い落ち、袖をじわりと赤く染めた。

血だ。これは、血液だ。

そう認識した途端、夥しい量の血液が、頭上から降り注いだ。

鉄臭い臭い^{にお}が辺りを充満させ、粘り気のある毒々しい血液が制服に染み込み、腕を、頬を、髪の毛を生々しく伝い落ち、制服を、鞆を、先輩たちを、世界を、赤く、赤く染め上げた。

「う、わあああああああああああ!!!」

「ゼロ!?!?」

「あああああああ!?!? あ? ……え……………え?」

双子の声で我に返る。

桜の花片が、頭上からひらひらと舞い落ちた。

何事かと前や横を歩いていた生徒が、不審な瞳で此方を見ている。

「どうしたんだよゼロ!」

「急に悲鳴上げて……………びっくりしたあ」

「……………」

身体を確認する。

血液は何処にも染み込んでいない。存在すらしていない。

頭を振れば、花片がふわふわわりと数枚舞い落ちた。

じゃあ、さっき見たあの赤いものは一体何だったのか?

「どうして…………?」

「ゼロ…………大丈夫…………?」

双子の声にはっと我に返る。
顔を上げると、双子が不安そうな面持ちで此方を見ていた。

「！ あ、すみません。何か花片の中に虫が混じっていて……」

「虫なんか混じっていたかな……？」

「虫い！？ ゼロ虫苦手だったっけ？」

「虫が苦手じゃなくても、いきなり花片打ちまけられたら誰でも悲鳴上げますって」

「つーかゼロ！ お前、らしくない悲鳴上げたよなー！」

「本当本当！ 僕たち初めて聞いたよ！」

「ゼロの悲鳴結構癖になるかもー！」

「……… 本当最低最悪な双子だよ」

ぎゃははと笑う双子を尻目に、零は足元に散らばる、先ほど頭から振り落とした桜の花片を摘み上げた。

何の変哲も無い。普通の桜の花片。

双子たちが握っていたせいか、熱で少し萎れている。

『フツーの花片だよな………』

瞳をぐしぐしと擦る。視力が落ちただとか、別段変わったことは無い。

目の前数歩先を歩く双子の後ろ姿だつてよく見えているし、やはり先程のは疲労から来る錯覚だったのかもしれない。

「疲れているのかな……」

「どうしたゼロー？」

少し先を進んでいた双子が、立ち止まり、自分が来るのを待って

いる。

帰ったら早く寝るか、なんて思いながら

「今行きます」

と双子の方へ向かった。

ざっと、薄気味悪い風が、桜の花片を吹き飛ばした。

あの人がいる。登校して来た。

八重桜の太い幹に隠れながら（此処ならあまり見付かりづらい）そこから、そっと、あの人を見つめる。

良かった。昨日の放課後は会えなかったからすごく落ち込んでいたの。

夢にあなたを見てしまうほど、落ち込んでしまったのよ。

あら？今日は珍しくマフラーなんかしてる。

しかもそのマフラー、去年ライラック・ハシドイと、シラギク街で買っていた色違いのマフラーじゃない…。そんなにお気に入りなの？

まあ、季節的に些か早い気もするけど、きっと彼のこと。季節を先取りしているのね。ファッションセンスがあるわ。さすがね。

私も彼を見習って、明日からマフラーを巻いて登校しましょ。

…ああ、今日もあの双子と一緒に登校なのね。

あなたはいつも双子と一緒にね。

私というよりも彼らという方が楽しいの？

…でも、そんなこと無いわよね。

あなたは私と一緒にいる方が楽しいはず。ええ、絶対そうよ！

…あら、双子がまたあなたにちよっかいを出してる。

その悪戯はこないだもやっていたじゃない。

頭の良い彼が何回も同じ手に引っ掛かるとでも？彼らも馬鹿ね。

………ほら、やっぱり！

彼は双子の悪戯を見事回避したわ！

さすが私の　　なんて、おこがましいわね。

まだ私のじゃないのに。私の馬鹿馬鹿。
なんて、少しの間あなたから目を離していたら…

「う、わあああああああああ！！！！」

あなたの悲鳴が校庭に響き渡る。

え！？ どうしたの！！ 一体何！？

あなたの方を見れば、両手を掲げ、顔を青ざめて大きな悲鳴を上げている。

今まで叫んだりしたことが無かった彼が悲鳴だなんて！

彼の傍で双子が慌てている。

何よ！？ 一体彼に何をしたの！！？

…ああ、良かった。彼、落ち着いたみたい。

どうやら双子の悪戯が過ぎたみたいね。

本当やめて欲しいわ。あなたに何かあったら私…。

あなたもあなたよ！ どうして双子ばかりに構うの？

私という人がありながら、あなたは登校も休み時間も昼食も放課後も帰宅もいつも一緒！

どうして学年が一緒の私というより、他学年の彼らといつも一緒なのかしら？

私には考えられないわ。

でもね、双子と一緒にいる時のあなたの笑顔、とても素敵な
の。

その笑顔を、いつか私にも向けて欲しいな。

あの日のように…。

あ、チャイムが鳴ったわ。彼も双子と一緒に校舎に向かっている。
私も行かなくちゃ。
今日こそあなたとお話できますように

がやがやとつるさい廊下。埃の臭いが鼻を掠める。

小走りで教室へ向かう生徒と、チャットをしながら教室へ向かう生徒。フォーンを見つめながら歩く生徒。友人と話しながら歩く生徒。

やることなすことバラバラだけど、同じ学園の生徒達が、あと7分と26秒程で鳴る朝礼に間に合うように、自分達の教室へと向かっていた。

「ゼロ君、おはよう！」

「おはよう」

後ろから来た女生徒に挨拶をされ、零は追い越され際に挨拶を返す。顔を赤らめた女生徒二名は、「きゃー」と言い、走って行った。

「人に挨拶しといて悲鳴上げて去るのはどうかと……」

「ゼロも罪作りな奴だよなー」

「本当本当」

「何が罪作りなんですか？」

「「そっという鈍感な所が」」

「？」

双子に何だかんだ言われつつ、中等部の棟に辿り着いた。

「じゃ、俺らはこの辺で」

「お昼にまた来るねー！」

高等部である双子は、零に手を振りながら中等部をのんびりと去って行った。

朝礼まで残り3分と47秒。

高等部の棟まで果たして双子は辿り着けるのか？

『ま、あの二人なら行けるよな』

「ゼロ君おはよー」

「おはよーゼロ君ー！」

「あ、おはよう」

挨拶を返せば、またきやーきやーと悲鳴を上げて去っていく女子生徒。だから何で挨拶返したただけで、いちいち悲鳴を上げられなきゃなんねえんだよ。

「あーイライラする……」

「おはよう。ゼロ」

「あーはいはいおはよ……って、ああ、リ、リラー！」

「朝から機嫌が悪いのね」

慌てて振り向くと、口元に手を置き、くすくすと笑う、可憐な少女が自分を見上げていた。

ライラック・ハシドイ。通称リラ。

ふんわりとした藤色の髪と、儂げな翡翠色の瞳が、見る者をうつとりとさせる優雅さを醸し出している。

「ごめん。まさか、リラだとは思わなくて……」

「あら、私じゃなかったらどんな顔で挨拶をしていたの？」

「多分こんな顔」

「嫌だゼロツたらー！」

鈴を転がすのような声で無邪気に笑うリラ。可愛らしい姿に少し見惚れてしまう。昔からずっと一緒の、大切な幼馴染。

「まあ、どうして機嫌が悪いのかは大体察しが付くわ。また悲鳴を上げられたんでしょ？」

「さすがリラ。解つてらっしゃる」

「仕方ないわよ。だってゼロかつこいいから」

「あまり嬉しくないね」

「そのかつこよさを、ちよっと周りに使ってみたら？　きっとクラス中大騒ぎになるわよ」

「使ってみたくも無いし、使う気も無い」

「つまらないわねえ」

リラはそう言つて笑うが、自分はまだ笑い事には思えない。自分の中性的な顔がコンプレックスなのだ。女なら女、男なら男と、はっきりしてほしい。

「トウアイドル先輩達から聞いたわよ。ゼロ、何か変な夢見たんですって？」

「伝達が早すぎだろあの双子……で、先輩方が何だつて？」

「ゼロが今日一日落ち込んでいるかもしれないから、よく見といてあげてくれって」

「へえ……」

先輩達の心遣いに、少し感心。

あんな双子にも、そんな人を気にかけてくれる心があったのか…。

「追記：もしゼロが居眠りして魔まされていたら写真を撮る様に」

「台無しだよ」

何が居眠りしていたらだ。授業中に誰が寝るか。
つーか魔まされねえよ。失礼な。

「でも、ゼロが魔まされるだなんて珍しいわね」

「そうかな？」

「ねえ、どんな夢を見たの？」

「え、聞きたいの？」

「うん！」

ふんわりと、綻ほびした笑顔にどきりとしつつ、夢の話のリラに話した。

リラは笑みを崩さず、終始笑顔で話を聞いていてくれた。

「変な夢ねえ」

「だろう？ その夢のせいで朝から遅刻しかけるわ、双子にからかわれるわ、変なものは見るわ…本当散々だよ」

「変なもの？」

「疲れているだけだと思っただけだね」

「それは大変だわ。早速先輩達にお伝えしなくちゃ」

「いやいやいや、何言ってるの」

リラが恐らく双子達に打っていたと思われるフォーンを、素早く取り上げる。

危なかったな…この子、先輩達にメール送信する寸前だったんだけど。

「あの双子の耳に入ったら徒じゃ済まなくなるだろ？」

「あら。私ゼロが先輩達に弄もられて困っている姿、見るの好きよ」

「……………」

うふふふと笑うリラ。

この子、可愛い顔してかなりのドSだわ。

先輩達に余計なメールを送らないように、リラに入念に釘をさし、
フォーンを返した。

「あ、ねえリラ、聞きたいことが…」

「おい朝礼始めるぞー席座れー」

零の声を遮るくらいの大声で、担任が教室に入ってくると、初め
からがやがやとうるさかった教室が、さらにつるさくなくなった。

「あら、先生がいらしゃったわね」

「席に着かないとな」

「じゃあ、また後でね」

ひらひらと零に手を振ると、リラは自分の席へと戻った。零も自
分の席 窓側の一番後ろの席へ向かった。桜の近い今の席は、零
のお気に入りの席である（しかも担任の目があまり届かないという
利点）

朝の挨拶をし終わると、担任は出席を取り始めながら、今日の予
定を話し出した。零は担任の話を、右から左へと受け流しながら、
外を眺めていた。

『今日も良い天気だな…』

桜の花片はなびらがふわりふわりと、風に幾重にも舞い上がっている。

ふと、薄紅の花片の合間に、赤いワンピースに、白いレースをあ
しらったエプロンドレスの姿が、垣間見えた。

「?」

身を乗り上げて、窓の外を見ようとしたり、ざっと、一陣の風が吹き、桜の花片を大きく吹き上げた。

その、大量の花片の合間から、にたりと笑んだ唇が、見えた気がした。

「何だ？」

「何だ？ は、こっつちの台詞だ一色おおおお！！」

ぱつと振り向けば、いつの間に自分の前に来たのか？ 額に青筋を立てた担任が、目の前で、仁王立ちをして立っていた。

「外に可愛い女の子でもいたのか？ 一色？」

「いえ…」

「じゃあ何だ？ 俺の話よりも夢中になるものが、窓の外にいたっていうのか？ ああ？」

全く…自分はこの担任がかなり気に食わない。相手も自分と同じようで、自分が何かする度に、いちいちしつこく絡んでくる。嫌みで偏見な教師。

「桜が…」

「あ？」

「桜が、綺麗だな、て思って…」

すつ、と此方を見つめる女子に、流し目を故意に向けた。すると、顔を一気に赤らめた女子達が、一斉に悲鳴を上げ、教室内が騒然とした雰囲気になった。

担任は慌てて、うるさい教室に、うるさい怒声を響かせる。リラの方を向くと、くすくすと笑いながら、口パクで「使わないんじゃない

なかったの？」と言ってきた。

『物は使いよう』

口パクで、リラに伝えた。

その後、数回の怒声を響かせ、クラスを静めた後、意気揚揚と嫌みな説教を始めようとした担任は、一時間目開始のチャイムにより、担任は憎たらしい顔を此方に向けて、教室を去って行った。やれやれ。

昼休み。屋上に続く階段にて昼食タイム。

「朝から担任の説教？」

「担任の呼びかけに気付かなくて？」

「一体何に夢中になっていたんだい？ ぜろ口ちゃん！」

「……………うるさいんですよ。先輩方。ちなみに説教はありませんでしたから」

購買で買った、学園人気No.1の苺ショートプリンパンを口に頬張りながら、双子はにやにやと此方を見て笑っている。よくそんな甘いものが食べられるな…。

「つーか流し目って何？」

「とうとうゼロも自分の身体を売るようになったか…」

「身体を張る、の間違いかと」

「言葉の文だよあーや」

「怒っちゃやつ」

ぎゃははははと、仰け反りながら笑う双子に、零は大きい溜息を吐いた。

朝の説教未遂事件は愚か、流し目までもが、もう既に双子の耳に入っているとは……………

『リラの奴…やるのが早いんだよ……………』

至る所にシートが張られ、被害者のものと思われる赤黒い染みが、地面にじつとりと、染み込んでいた。

その血痕を見ていたら、朝の【桜の花片血飛沫事件】（自分で命名）を思い出してしまい、何だか気味が悪いので、フォンチャネルを替えてみた（ディー先輩のフォンなのだが・）しかし、どのチャネルも、シラギク街で起こったニュースを、忙しく報道していた。かなり被害者が出たのだろうか？和都でこんな悲惨な事件が起きるだなんて、珍しい。

「まさか、あの夢が比例していたりだなんて……考え過ぎか」

「シラギク街って、よく放課後に立ち寄る奴らが多いよな」

「っーか犯人も犯人で、昼間から盛んだな」

「……まるで他人事のようにあんだ等は」

双子の自由さに、厭きれてものが言えなくなる。

「てか、これ学園の近くだろ？」

「しかも犯人未だ逃走中……てことはさ」

「「学園臨時休校有りとか!？」」

「やっりー!! と両手を打ち合う双子。本当にこの双子はもう……。」

「先輩方解ってます？ 確かに学園の近くで起こった事件ですけども、そう簡単に休校だなんて」

チャイムが鳴った。しかも、予鈴のチャイムではなく、生徒や教師の呼び出しなどに使われる臨時のチャイムが。そして、切羽詰った声の、教師の放送が、階段に響き渡る。

『校内の生徒は、速やかに自分のクラスへ戻ってください。繰り返

します。校内の生徒は、速やかに 』

「……………」

「……………」

「……………」

「休校、当たりだな」

双子がこちらを見やって、にやりと笑った。

「……………ええ」

ああ、何もかも、朝の夢のせいだ。
零はがくりと、肩を落とした。

双子の予想したとおり。警護隊は、シラギク街で起こった事件の二次被害を防ぐ為に、事件現場に近い学校一帯に、午後から臨時休校という処置を出した。

担任が、警護隊から出された資料を基に、シラギク街で起きた事件のことを、感情移入しながら話している（担任は国文担当なのだ）そんなところで感情移入しなくても良いのにと思いながら、窓の外に目を向けた。桜の花片が舞う中、自分の子供を迎えに来た親御達の車等が、校門の前に殺到している。

『 お迎え、か 』

ちよっとだけ、羨ましい。 本当に、ちよっとだけ。

「……というわけで、明日の登校は、学園からの連絡が入るまで自宅待機だ。解ったな？」

「はい」なんて、幼稚園か此処は？ と言いたくなるような、クラスメイトの返事を聞き、委員長の指示で立ち上がり、担任に挨拶をする。

先生さようなら。さ、帰りましようかな。

「おい、一色」

「？」

鞆を肩から担ぎ、教室を出て行くことしたら、担任に呼び止められた。朝の説教を今此処でする気がこいつ？

「一色、お前、親御さんは迎えに来ているのか？」

「いいえ」

「殺傷犯がまだうろついているんだ。一人は危険だぞ？」

「まあ、仕方ないでしょう。一人で帰らなきゃいけない状況なんで」

珍しく心配する担任なお構いなく、零はぶっきらぼうに答えた。朝のことを忘れたと思うな。

「親御さんが事情で迎えに来れない生徒は、担任が送っていくことになっているんだが、お前のことを家まで送ると、申し出た生徒がいてだな」

「？（誰だ？）」

「ちょうど良いから、お前、送ってもらったらどうだ？」

こいつ、ただ単に面倒くさいだけなんじゃないのか？

「ありがたいですけど、迷惑じゃないですかね？」

「いやあ、あの様子は有無を言わさずというか、是非ともっていう感じだったなあ……」

「はあ。じゃあ、お言葉に甘えて……」

「「ゼロー！」」

零の言葉を遮るように、高等部の練の方から、トウィードル兄弟が現れた。

「あ、先輩」

「迎えに来たぜー」

「一緒に帰ろー」

にこにここと笑いながら、悪気も無く、純粹に空気を読まず、零と教師の間に双子は颯爽と割り込んだ。

「ちょっと先輩。今先生と話をしているんですけど…」

「えー？ 何ー？ 早く帰ろうよー！」

「……………」

聞く耳持たずか。担任の方を見れば、苦々しい顔付きで突っ立っていた。一応教師なんだから、生徒の好き嫌いで態度変えるな。本当嫌になる。

本日何回目なのか解らない溜息を一つ吐き、後ろから手を回してきた先輩を無視して

「……………すみません先生。その生徒の人に非常に申し訳ないんですけど、断っておいてください」

「あ、ああ…だが、お前はどっやって帰るんだ？ その……双子達と帰るつもりか？」

「ええ、まあ……断る理由もありませんしね」

あははははと、棒読みで笑う。背後で「断る理由って何だよゼロー！？」と双子が騒いでいるが、無視を貫く。

「というわけで、帰りますね」

「ああ。気を付けて帰ろよ」

「はい。さようなら、先生」

社交辞令よろしく、足早にその場を去って行った担任。その担任の後姿を、双子は舌と中指を立てて見送った。

「俺あいつ嫌い」

「俺も」

「先輩達はあの先生問わず、全ての学校の先生が嫌いなんじゃないんですか？」

「まあねー」

同じ顔で、舌を出して笑う双子。

常に二人一緒に行動を共にし、明るくムードメーカー的な存在の二人は、同級生や後輩等には、結構人気があるのだが、その反面教師等からは、あまり良いように思われていない。

「あんまりあんな態度取らない方がいいですよ？」

「嫌いなものは嫌いなんだよ」

「ゼロだって、嫌いなものとは相容れられないだろう？」

「……まあ、そうですね」

双子の言い分にも一理ある。
「だけど、まあ」

「それでも、時と場合を考えてくださいよ。一応、先輩達は、自己より年上なんですから」

「はいはいはい」

口を尖らせながら、不満げに返事をする双子。悪たれてはいても、聞き分けだけは何故だか良い。

「さ、早く帰りましょうか。未だ犯人は逃走中なんですから」

「早く帰りましょう……？」

「ええ。早く帰りましょ、う……？」

おかしい。何故だか嫌な予感がする。とてつもなく、嫌な予感がする。

背中を嫌な冷や汗が、つう、と一筋流れ落ちる。

あー…振り向きたくない。後ろを振り向きたくない。

そうっと、本当にそうっと、後ろを振り向く。振り向きたくないけど、双子の方を、ゆっくり振り向いた。

「俺達が」

「そうすんなりと」

「帰ると思ってるの？ ゼーロ？」

ああ、最悪だ。

双子のやる気スイッチを押してしまった。

こうなってしまったら、もう双子を止める術は無い。絶対に。

「さあゼロー！」

「殺傷犯が出たシラギク街に！」

「Let's Go!!」

「……………」

ああ、本当に今日は最悪な日だ。

檻桜学園前停留所からバスに乗り、二つほど行った停留所【チヨウヨウ】

その停留所を下車すると、紅、黄、白の菊で飾られた門が聳えている。その三つの門のうち、白菊で飾られた門を潜り、10分ほど進むと、シヨツピング街【シラギク】に出る。

「「シラギク街到着ー！………しかも歩いて」」

あー疲れたーと、白菊門に寄りかかる双子。お前等毎日徒歩で学園に通っているじゃないか。

「仕方ないですよ。自分等は徒歩で登校していて、バスを利用する為のパスカードを、自分達は持っていないんですから」

「特待の称号使えたらなー」

「この称号、本当訳に立たねえよなー」

桜の花片はなびらが埋め込まれた、檻桜学園特注の翡翠のネクタイピンを見て、ダムは口を尖らせた。零もダムと同じように、花片が埋め込まれた、双子とは違う、青藍玉のタイピンを見つめた。

零とトウイードル兄弟は、檻桜学園の特待生である。『一に成績、二に家柄』をモットーとする学園において、零と双子は、唯一成績だけで特待制度をキープする、学園きつての異端な存在で、あまり教師等から良いように思われていない（特に双子）しかし、零と双子の頭脳、そして温和で、陽気な人柄に対し、右に出る者はいないというのが事実である。

「まあ、他の場所では色々、役に立つ称号なんですから。一応大事にしましょうよ」

「確かになー」等と双子は言い、三人はシラギク街に入った。

「これは……」

「酷いな」

双子の言葉に無言で頷く。

名前の通り、白を基調とした、飾り気の無い、だけど、沢山の白菊で彩られた、美しいシラギク街が、

「酷いってものじゃない…酷過ぎますよ……」

穢れていた。シラギク街は、赤く、真っ赤な色に染まっていた。

花壇に植えられている、白く咲き誇った白菊が、飛び散った赤に、染められていた。

双子がよく通っていたメンズファッションのお店。そのショーウィンドウや、白い壁に、被害者のものと思われる血液が、完璧に拭き切られておらず、擦れて付着していた。

いつもリラと一緒にいるグッズ店。子供が落としたのだろうか？うさぎのぬいぐるみが、ぽつんと一人、寂しげに店の前に落ちていた。ぬいぐるみの傍には、夥しい量の血痕が残っていた。

「こりゃ…組織ぐるみの犯行だろうな」

「どんだけだよ、この血の量…致命傷どころの話じゃねえよ」

「つーか犯人今逃走中だろ？ 一人の犯行じゃねえなら、複数犯逃げているってことだよな？」

「警護隊も警護隊で、何してんだかな」

ニユースでは、無差別殺傷事件と言っていた。だが、この夥しい血の量や、配属されている警護隊の尋常じゃない派遣数と、緊迫した空気。あまりにも、常識を逸脱していた。

「俺、ちょっとあそこにいる警護隊の奴に、話聞いて来よう、と！」

「あ、おい兄弟！」

ダム of 制止を聞かずに、ディーは黄色のテープを飛び越え、警備をしている警護隊に、無謀にも走り寄り、行ってしまった。

「もー！ 少しは人の話を聞けっつんだ！ なーゼロー？」

「……………」

「ゼロ？」

何だろう、この、胸騒ぎは？

シラギク街に入ってから、動悸が激しい。一向に治まらない。

おかしい。今までこんなこと、一度も無かったのに…。

この、沸き立つ感情。胸の奥底から、何かが込み上げて来る感じ……喜び？ 快感？

違う。そうじゃない。だけどこんなこと、確か、以前何処かで体験したような…いや、そんな筈は無い。そんなこと、ありえない。ありえない。ありえなさすぎる。

だって、14年間生きてきた中で、

ひとごろしなんてするわけがない。

じゃあ、一体何なのだろう、この、心の底から、湧き出でて来るような、狂喜の感情、は

「ゼロ、大丈夫か？」

不意に話しかけられ、びくりと身体が飛び上がる。

顔を上げると、ダムが首を傾げ、身体を屈ませて顔を覗いていた。

「顔、真っ青だよ？」

「え」

「すごい血の気引いてる。大丈夫？」

「…多分、大丈夫、です」

詰まりながら声を出す。心なしか、足が地に着いている感覚が無い気がする。

「嘘。大丈夫じゃない」

「……」

「すごいふらふらしてる」

「…確かにそうっすね」

ダムの言うとおり、シラギク街に入ってから、何だか体が重く感じ、立っているのがかなり辛い。

とうとう足に力が入らなくなり、思わず後ろにふらりと行きかけた零を、ダムが片手で背中を支えた。

「はは、すみません」

「もう、帰ろう」

「そうですね…警護隊の方々に学園なんか連絡されたりでもしたら、堪ったもんじゃないですし…」

「違うよ」

「はい？」

「ゼロが心配だから、もう帰ろう」

「……………」

真剣な表情で、ゼロを見つめるダム。

初めて見るダムの真剣な表情に、ゼロは思わず声が詰まった。

「……ダム先輩でも、たまには真面目なこと言っんですね」

「？ 俺いつでも真剣だよ？」

「ははは。嘘言っな」

普段通りの、冗談を言い、人をからかう無邪気な表情に戻る。

やっぱり、ダム先輩は、笑っている顔が一番良い。真面目な表情は、一年に数回程度が良い。もしそれ以上あつたら、この世は破滅するだろうな……………うん。ちょっと、言い過ぎた。

「おい兄弟！」

ぼやける視線の先に、警護隊と何やら話をしているディーの姿が見えた。

ダムの呼び声に気付いたディーは、警護隊と二言ほど交じわせてから、黄色のテープを飛び越え、此方へ向かって来た。

「悪い悪い！ ちょっと話し込んで…って、ゼロ！ どうした！？」

零のもともと色白な肌が、いつも以上に青白くなり、体調の悪さを醸し出していた。慌てて走り寄って来るディーの姿が、霞んだ視界に見えた。

「貧血かもしれないんだ…なあ兄弟もう帰ろうぜ？」

「当たり前だろ！早く帰ろうぜ！！」

「ゼロ、歩ける？」

「はい。もう大丈夫で…」

ダムの支えていてくれた手から離れ、数歩進み、そして、かくんと、膝から崩れ落ちる。ガツ、と地面に強く膝を打ち付ける。痛い。嘘だろ。足に力が入らない…。

「ゼロ！！？」

双子が慌てて抱え起こしてくれたが、両足に力が入らなく、両脇を支えてもらって、立つのがやっとだった。

「ゼロ大丈夫か！そんなに体調悪いのか！？」

「いや、体調は悪くは無いですけど…」

「じゃあ何で今倒れかけたんだよ？」

「こ、腰が抜けたとか…？」

「……………」

「ゼロ、今までに無いくらい」

「つまらない言い分けだね」

厭きれ返った溜息が二つ、シラギク街に重々しく響いた。

溜息を吐きたいのはこっちだよ。心の中で、大きい大きい溜息を

吐いた。

その後、腰を抜かして歩けない零を、デイーが肩に担ぎ、三人はシラギク街を後にした。そして、家まで送ってくれたお礼にと、零の家で食事（零自作の手作り料理）を済ませた後、双子は家へ帰宅した。

食器を洗浄機に入れ、そろそろ風呂にでも入ろうかな、等と考えていると、テーブルに置いていたフォーンが、けたたましい音を立てて鳴った。『こんなに音量でかく設定していたか？』等と思いつつ、耳を押さえながらフォーンを取る。着信はリラからだった。

慌てて通話ボタンを押すと、フォーンヴィジョンが開き、パジャマ姿のリラが映った。

>ハロー、ゼロ<

「やありラ。何か用？」

>デイー先輩が、今ゼロに電話してみろって。何かあった？<

「あの野郎……」

音量変えやがったのやっぱりお前か…っか、いつの間に人のフォーン弄っていたんだ？ 食事作っている時か？

>どうかした？<

「あー…何でも無い。恩を仇で返しやがったなーって思ったのよ」

明日覚えているよ双子（兄）。

> そういえばゼロ、腰抜かしたんですって？<

「え、もうリラの耳に入ってたんの？ あの双子いつフォン打ってんだろ？ 情報早すぎ」

> 先輩達からじゃなくて委員長から聞いたんだけど<

「委員長から？ あそこにいなかったはずだけど……」

> 先輩達から聞いたんですって<

「…………… あいつ等何で、うちのクラスの奴のメアド知ってたんの？」

> クラス全員の分知ってるのかなんとか…ふふ。先輩達って、本当面白いわね<

面白いどころの話じゃないよ。自分でも知らないよ。クラス全員のメアドはおろか、委員長のメアドすら知らない。あの双子、もしかしたら学園全域の生徒のメアド知っていたりして…。

> もう大丈夫なの？<

「ああ、うん。多分、貧血だと思うし」

> 貧血？<

「結構、酷かったから、その、シラギク街……………」

思い出しただけで、吐き気がする。行くべきじゃなかったんだよ。あの場所は。光景を思い出して、また気持ちが悪くなってきた。

> 私、てっきりアレの日かと…<

「違うから」

アレの日なわけあるか！ 一体何を言い出すんだ。

「リラ、からかうのもいい加減にしないと怒るよ？」
> 怒っちゃやつ <

何かどっかで見たことある動作だな。

「あ、そうだ。ねえ、リラに聞きたいことがあるんだけど」

> あら、ゼロにしては珍しいわね。なあに？<

「朝聞き逃しちゃったことなんだけどさ、【アリス】って、知ってる？」

『アリス』

> アリス、ねえ…ゼロが見た夢の声でしょう？<

「うん。リラなら何か解るかなーなんて思ったんだけど」

> 確か、昔お母様に読んで頂いた本に、そんな名前の本があったわ<

「それって、英帝国の？」

> 確かね。あ、スミレなら解るかしら？<

フォーンヴィジョンから、リラが一瞬消え、再びヴィジョンに映った時、リラの膝の上には、リラのお気に入り、うさぎ型ロボット【スミレ】が一緒に映った。

「やあスミレ」

> コンバンハ。ゼロ様<

「久しぶりだね。元気？」

> ロボットニ、元気モ何も有リマセン<

スミレは長い耳を弄りながら、零の問いにぶっきらぼうに答えた。リラが困ったように、苦笑いをした。

「相変わらずつまらないなー」
> ツマラナイ、ダナンテ失礼ナ<
> スミレ。ゼロをあまりいじめないで<
> 先程散々イジメテイタデハ無いデスカ、才嬢様<
> あれはいじめじゃなくて、からかっていただけよ<
「結局一緒じゃないか」

ヴィジョンの向こう側で、子供のような（子供なのだが）言い合
いをする一人と一体に、零は厭きれて答えた。

「本題に入るけどさ、スミレ、君【アリス】って言葉、聞いたこと
無いか？」

> 昔奥様が、才嬢様二読マレテイタ、絵本デゴザイマスネ<
> スミレ解る？<
> 検索シマス。暫クオ待チクダサイ<

スミレの両目がチカチカと、水色とピンク色に交互に光る。見た
目が兎なだけあって、ちょっと不気味と思うのは、内緒。

> 検索終了シマシタ<
「お、早いな」
> スミレ、どうだった？<
> ハイ。検索ノ結果『不思議の国のアリス』ト『鏡の国のアリス』
トイウ結果が出マシタ<
「ああ、その本か！」
> 昔お母様に読んで頂いたのを思い出したわ！<

小さい頃、リラの家へ遊びに行った時に、リラの母親が読んで聞
かせてくれたのを思い出した。

> 何だか久しぶりに読みたくなっちゃった
「懐かしいね」

『不思議の国のアリス』白兔を追い掛けて、穴の中へ落ちてしまったアリスが辿り着いた場所は、パドクスに染められた、不条理と非現実の、地下世界の夢の中。それでも、白兔を追い掛け続けたアリスに、降り掛かるいくつもの災難。色んな夢の国の住人に出会い、チエシヤ猫に導かれ、そして最後に、アリスは夢の中から目を覚ますのでした。チャンチャン。

『鏡の国のアリス』は…確か、不思議の国のアリスの続編だったんじゃないかったっけ？

> そのアリスのことなのかしらね？<

「さあ？ でも、アリスが解ったから、胸のもやもやが晴れたよ。ありがとう」

> いえいえ。あ、ねえ聞いてゼロ！ お母様がね今度ゼロに…<
「え？ なになに…」

他愛の無い会話を一時間ほど続けた後、お勉強の時間と、スミレに伝えられたリラとの通話を終了し、フォンヴィジョンを閉じる。消えたフォンヴィジョンを見て、ふー、と一っ、溜息を吐く。

今日は何とも疲れた日だった。変な夢は見るわ、双子に振り回されるわ、初めて自分の身を犠牲にして説教から逃れるわ、殺傷事件現場へ行くことになるわ、腰を抜かすわ……。

ぐだー、とソファーに横たわっていると、だんだん睡魔が襲ってくる。ああ、このまま寝てしまっつて、明日の朝風呂に入ろうかな、と考えていると、キッチンテーブルから、大音量で鳴り響くフォーンが、薄ら夢の世界へ旅立っていた自分を、現実世界へ呼び戻した。ああ、音量変えるの忘れてた。

けたたましく鳴り響く（いや、鳴り叫ぶ）フォーンを取りに、し

ぶしぶ立ち上がり、キッチンへ向かい、フォーンを手を取った。

【着信：ディー先輩】

「……………」

今すぐ切りたい衝動に駆られる。そして切ろうとボタンに触れようとした時、まだどこもボタンに触れてもいないのに、強制通話となってしまった（一種のホラーかこれは？）

> やっほー！ ゼローー！！<

「……………」

> びっくりしたー？ ねえねえ、びっくりしたー？<

ヴィジョンの向こう側で、ぎゃははと大笑いをするディー。もし電話じゃなく、目の前にいたら、即座にぶん殴っているだろう。取り敢えず、やり場の無い怒りを拳に込め、テーブルに打ち付けた。痛い。

「…………… 一体何の用ですか？ 自分は今すぐこの電話を切りたいのですが」

> もー冷たいなーゼロはー！ 心配だから電話してあげたのにー！！<
「全力で胸糞悪いわ」

ふー、と溜息を吐き、椅子に座る。何かに身体を預けていないと、脱力してしまいそうだ。

「それで、本当に、一体何の用ですか？ 今すっごい眠くて仕方ないんですけど」

> もー！ 本当に冷たいなー！ 連続殺傷犯について解った情報があるんだけど、知りたくない？<

「…………… どーでもいい情報ありがとございます」

> どーでもいいってなんだよゼロの馬鹿っ！！<

「本当…そんな情報いらないっすよ……………」

とうとう脱力。全身から力が抜けて、ごつんとテーブルに額が落ちる。あ、冷たくて良い気持ち。

> まあ、いいから聞けって！ 犯人の特徴が解ったんだ。裏クグツの奴等が偶々シラギク街に行ってた奴がいてさ<

「へえ、一体何の用で、シラギク街にいたのかは追求はしませんが、よくぞご無事で」

> 本当だよなー。まっ、数人殺られたらしいけどなく

人が数人犠牲になったというのに、軽い調子で飄々と話すディー。裏クグツの奴等のことは、死のうが死ななかるうが、ディーにとつては、どうでもいいことらしい。

「生き残った方々も、運が良かったことで…」

> まあな。だけど、退院しても、もう戻れないだろうなく

「戻れない？」

> 精神の方をやられたみたいなんだ<

「ああ」

納得する。一応友人である者達が、目の前で、無残に切り裂かれたうえに、自身まで傷を負い、仕舞いにはあんな凄惨な状況で、生き残れた幸運な、被害者だ。

「そりゃ、あんな凄惨な状況下にいたら、精神壊れますよ」

> いや、違うんだよ<

「？」

> 何かさ、夢の中にいるってどうか…幻覚でも見せられた、のかな？<

「？ 益々意味が解らな…」

> そーいえばさ！ この殺傷犯の情報、警護隊には未確認の情報ら

しいから、情報屋とかに売ったら、結構高値で買ってくれるかも…
相変わらず人の話を聞かず、我が道一筋なデイー。そんな興奮しながら喋るデイーに対し、零は黙ったままでいるが、デイーはそんなのお構いなしと、勝手に話を続けた。

> 犯人は女。しかも見た感じ10〜15歳ほどの金髪の少女。服装は赤いワンピースに白のエプロンを重ねたエプロンドレス姿で
『エプロンドレス……………?』

朝、学園で見た、桜の花々の合間から見えた、赤い少女の姿が、薄らと思い浮かんだ。誰だ？ お前は、誰だ？

> 耳下辺りを、赤いリボンで結わいたツインだつてさ。それで肝心の凶器が……………って、ゼロ？ 聞ってる？ ゼーロー？ <

何だか、デイー先輩の声が遠くで聞こえる…。閉じた瞼がとても重い。開けたくない…。

「聞いていますよー…」

> うっそだー！ 絶対聞いてないってー！ <

「聞いて、ま……………」

> ゼロー？ 寝てんのー？ それとも狸寝入りー？ <

「……………」

デイー先輩が何か必死に叫んでいる…。デイー先輩の呼ぶ声を子守唄代わりに、自分は闇の中（基夢の中）へ、ぽちゃんと落ちた。

赤に近い月が綺麗に光る、夜空の下。

「

可愛らしい鼻歌に、何か、粘ついたものを引きずる音が、異様に混じる音がする。

「

ローファアの靴裏に、粘ついた液体が付着しているが、気にしない。歩いていけば、いつか取れるだろう。放置放置。

手にしているものにも、粘ついた液体が滴り落ちているが、気にしない。時間が経てば、乾くだろう。自然乾燥自然乾燥。

「あ

とある高層マンションの前に、立ち止まる。明かりが灯るマンションを見上げ、見上げ、視線が最上階の部屋へと向けられる。

「……………ふふっ

血で染めたかのような赤い唇が、にんまりと嬉しそうに、弧を描く。月に照らし出された白い肌が、赤い月明かりと混じり合い、薄紅色に染まる。

そんなに悲しげに叫び続けているのに、お前の所に、その求めるものは来ないんだね…。

『××××××』

ゆっくりと、足元を警戒しながら、ゆっくり、前へ、声のする方へ進む。

『××××××』

教えてほしい。どうしてそんなに叫ぶのか、どうしてそんなに悲しむのか、どうしてそんなに嘆くのか、どうしてそんなに、

『アリス』

アリスを、求めるのか……。

「……アリス」

空くうに手を伸ばす。何も掴めない。近くにいたのに、いつも傍にいたのに……この手は、何も、掴めていなかった。アリス。君の、その、白く、柔らかい、優しい手に……触りたい。

「？ あ痛っ！」

ぱちりと目を開けると、顔面に何か落ちてきて、鈍痛が走る。目覚めは最低最悪。朝から一体何なんだ？ 顔に落ちたものを右手で持ち上げたら、犯人は自分の左手。何故だか解らないが、自分の左手は、何かを掴むように、求めるかのように、手の平を力いっぱい開いて、自分の意思とは関係無く、天井に大きく掲げていた。そして、力無く、顔面に落下した。何故だ？

「何やってんだろ自分……」

じんじんと痛む鼻を押さえながら、左手を見る。特に問題無し。

「……………あと、少しだったんだけどな」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7882x/>

【タイトル】Dear Alice【未定】

2011年11月18日04時32分発行